

## 「それで、ボク（私）は安心した」

～保育における南無阿弥陀佛～

子どもと保育研究所ぶろほ 所長  
山田 真理子

### 1. 「子どもの立場に立つ」力の養成

「子どもの立場に立つ」とは、保育者の養成や研修では当たり前のように言われ続けてきている。

正しいことを言うのは簡単だ。野球においてかつてのスタープレイヤーが「飛んでくる球の芯にジャストミートして、思い切り振り切ればホームランは打てる」と言ったという。しかし、そう聞いただけでホームランができる打者が育つわけではないことは自明のことである。ジャストミートする練習、バットをぶれずに前に振る練習や筋力トレーニングが必要なのでだろうし、その練習のためのプログラムがあつてはじめて選手の身体につくのである。

では、保育者はどうだろうか？「子どもの立場に立つトレーニング」がされているのだろうか？もちろん天性として共感性を持っている人や自分で力をつけてゆく保育者もいるかもしれないが、保育者養成・研修に関わる大学教員は、「子どもの立場に立てるようになるためのトレーニングプログラム」を、野球コーチ並みに開発していただろうか？

筆者は「子どもの立場に立つ」ことに主眼を置いたトレーニングプログラムを子どもと保育研究所ぶろほの「保育心理演習」という科目において実践している。18場面の保育における問題場面を提示して、それに対して保育者としてどう答えるか？どう対応するか？を考え合うワークショップを行い、さらに子どもの立場に立ったロールプレイを通して、子どもの気持ちを内面から理解してゆく想像性を開拓するプログラムであるが、その

ワークの後半がここで紹介する「一人称ワーク」と名付けたものである。

## 2. 呼ばれてここにいる

保育現場の方から「この子に困っているんです」「この保護者に困っているんです」と相談を受けることがある。これは「保育者が（保育がうまくいかなくて）困っている」ということだろう。しかし、一番困っているのは、一番生きにくさを感じているその子ども自身である。「子どもが困っている」であり、「保護者が困っている」のである。

そして、だからこそプロのサポートを、保育者を必要としているとも言える。もし、親が子どもの発達に必要な関わりを自然に行える親で、子ども自身も特別な知識がなくても理解できる一般的な発達を遂げてくれる子どもであれば、保育者という専門家はいなくてもいいのかもしれない。逆に言えば、そうでない親がいて、そうでない子どもがいるから保育者という専門家が、専門の学びを持った人が「必要とされる」のである。保育者は子育てがうまくできない親や周りとうまくいかない子どもに呼ばれて、専門家としてここにいると考えられないだろうか？

保育者が困った時は、「子どもたちのSOS」なのである。いま、全身全霊で生きている子どもたちが、何かに困っているから、保育者が困るような言動を起こしてしまうのだと考えてほしい。それを分かりたい、それを軽減したいと思わないだろうか？あなたに従わせようすることや集団に合わせようすることが、いかに傲慢であるかに気づいてほしい。

私は、「問題児」「障害児」「気になる子」と呼ばれる子どもたちの言動に、保育者への問いかけを感じる。「あなたの保育では気持ちが動かない！」「そんなふうにされたら安心できない」「もっと見守って！」「僕はここにいいの？」という心からの問いかけである。それを、子どもの声として聴き、自分の思いとして感じることが、子どもの立場に立つということではなかろうか。

その子どもたちが保育者に「もっと分かって」「もっと勉強して」「もっと対応のポケットを見つけて」と訴えかけているのであり、それに導かれて、研修に、講演に、学びにやってくる保育者は多い。そんな時、講演を聴きながら保育者の頭の中には、それらの子どもたちの姿が浮かんでいるのだろう。

保育者を困らせてしまう子どもたちは保育者の話を聞きたくないと思っているわけではない。保育者に従えない何かを抱えている子どもであるからこそ、保育者が共に歩んでくれることが必要なのである。だから個別支援が必要な子どもこそ、保育者を必要としていて、保育者を育ってくれる存在だと言えるのではないだろうか。

## 3. 「あなたの一言」ワークブックの構成

ワークブックは、ワーク1～5から成り立っており、ワークを積み重ねてゆくうちに、「子どもの気持ちに寄り添った保育者」の視点が自分の中に生まれるように構成されている。

### ①ワークの前提

保育においてもっと大切なことは「子どもとの間に信頼関係を築くこと」と言っていいだろう。しかし、そのためには何が必要なのかを考えてみたことはあるだろうか？

ただ長い時間関わっていれば信頼関係が生まれるというものではないし、優しいだけの保育者では子どもが信頼するとは限らない。子どもに信頼される保育者とはどのような保育者を言うのかを考えたアプローチが必要なのであるし、それを学ぶことが保育者養成には求められるのである。

子どもとの間に信頼関係を築くには・・・

子どもが

1. この人は「自分のことを分かってくれている」

2. この人は「自分のことを分かろうとしてくれている」
3. この人は「自分のことを好いてくれている」

の、どれかを感じることが基盤となる。子どもがそう思えることから信頼関係が築かれていくのである。

そのためには

- A. 子どもが言いたいこと、話したいことの内容の代弁
  - B. 子どもの感じていること、気持ちへの共感と明確化
- を、ことばとしてその子に言ってやることが必要なのであり、これはカウンセリングやプレイセラピーの基礎でもあり、そのトレーニングは丁寧になされる必要がある。

そして、子どもにとって「言って欲しいことを言ってくれる保育者」ほど力強い味方はない。これらは、子どもの立場に立って考えることができるようにすると簡単なことかもしれないが、日常的な対応に追われていると、意外に難しい。そして保育者たちは「そんな時間の余裕はない」「人手が足りない」などと、子どもの立場に立てない理由をいくらでも挙げることができる。

しかし、ここで提起する一人称ワークを何度も繰り返すことで「子どもの立場に立てる保育者」になることは、子どもと真の信頼関係を結ぶことができる近道であり、保育が楽しくなって、毎日が生き生きしたものになる道もある。

以下、ワークブックに沿って、その方法と背景にあるねらいを紹介する。

#### ②ワークプログラム1

ワーク1では、提示された18場面について、その主人公である子どもにあなたが関わるとしたら、どのような姿勢でどのようなことばをかけるかを具体的に回答欄に書く。この時点では、どこでも行われる「レクチャー

によって理解している程度」が把握される。受講生や学生たちは、「子どもの立場に立ったつもりで」回答欄に記入してゆく。

時々「子どもの立場に立った応答を練習しているのですよー」と声をかけて思い出させないと、途中から自分の言いたいことを説教のように声かけをする（書き込む）人も少なくない。

#### ③ワークプログラム2

ワーク1が終わったら（全部の項目に書き終わらなくても、1項目ごとにワーク2に進むことも可能である）、ワーク1で自分の書いた言葉をロールプレイの中で子ども役の自分が言ってもらうことで「どんな気持ちで受け取れるか？」を体験する。

2人一組になり、書いた回答を交換する。自分が主人公の子ども役になって、自分が書いた回答を保育者役のパートナーに読んで言ってもらうのである。自分の書いた回答は、子どもの立場で聞いたときに「自分の立場に立ってくれている」と感じるはずなのだが、このロールプレイが始まるや、あちこちから笑いが起こる。「全然、違う！」のである。「お部屋に入ろうか？ ほら、お友だちが待ってるよ」と言われても、決してその気にはなれないし、「この先生は僕のことを分かってくれている」とも感じないのである。

「では、何と言ってほしい？」と主人公の子どもの立場のままで考えて、書き換えてゆくのがワーク2である。

#### ④ワークプログラム3 「一人称ワーク」

さらに、ワーク3では、問題場面を子どもの一人称で書き換える。「シンくんは・・・」と書かれている文章を「ボク（私）は・・・」に書き換えるのである。一見そのまま主語を替えればいいように思われるが、書き始めるとき、その背景となる気持ちや理由を想像しないと書けないことが分かる。そして、書き換えられた文章は受講生によってかなり異なってくることが多い。それぞれの体験や連想が大きく左右するのである。ということは、

相手の立場に立っているつもりでも、かなりその受け取り方は、その人によって違うということが分かる。

#### ⑤ワークプログラム4

次に、その一人称に書き換えたうしろに、最初のワーク（その場面であなたはどうのように応えるか？）で書いた応答を、子どもの立場から見たことば（「そこに先生が来て、・・・」）で付け足してゆく。

（応答例）私は近づいて行き、「シンくん、どうしたの？」と声をかける。

→（書き直し）すると、先生が近づいてきて、「シンくん、どうしたの？」と言った。

ここまでが一人称ワークである。

ここまでやってきて、これが、子どもの立場に立った応答であったかどうかを判断するのは誰だろうか？講師や教員が「こういう応答はいい、こういう応答はよくない」と評価するものではないだろう。ここでこそ、子どもの立場からの判断でなければならない。

そこで、ワークではさらにその後に、  
「それで、ボク（私）はホッとした（安心した、落ち着いた）」という言葉を繋げてみる。

この「それで、ボク（私）はホッとした（安心した、落ち着いた）」ということばが、その前の文章としっくりいけば、それは子どもの立場から安心できる対応であったと言える。しっくりいかない場合（例えば、「そこに先生が来て、「シンくん、お部屋に入るよ」と言った。「それで、ボクは安心した（？これは繋がらない！）」）には、自分の気持ちの中でしつかりいくまで子どもの気持ちが落ち着くことばを探し続けることになる。

「真宗保育とは、子どもがそのままにいて安心し、安心している子どもと共にいることで、保育者が自らの矛盾と、人間として生きる本当の意味を知られ、子どもも保育者も、自己の存在に喜びを感じる営みである」と大谷保育協会は真宗保育の理念を述べている。すなわち、「それでボク（私）は安心した」に繋がる関わりこそが、「子どもがそのままにして安心してそこに存在しているか」という保育を照らす光だと言えるだろう。

実例を示そう。

場面1＜すぐに帰りたがるシンくん＞

朝、子どもたちは集まってきた。シンくんもお母さんに連れられて部屋に入り、お母さんは帰られました。シンくんはしばらくの間、部屋の中でじっと周囲の様子を見たりして黙って立っていましたが、急に逃げるよう部屋を飛び出して門の方に走ってゆきます。シンくんはいつも数分間しか部屋の中にいることができません。「僕、帰るんだ！」あなたは？

（一人称に書き換え例）

僕はお母さんと一緒に園に行き、お部屋まで行きました。お荷物を僕のロッカーに置くと、お母さんは僕を置いて部屋の外に出ていっちゃった。あーあ、バイバイも言ってないので。部屋の中を見ると、壁にぞうさんの絵があって、みんなは積み木をしていて、僕が好きなおもちゃがなくて、つまらなかった。「お母さんがいいや！」と思って部屋を飛び出して、門まで来た。

（その後に、場面1に対してワーク1で自分が書いた応答を、子ども視点の一人称で書き換えて続ける。）

すると、先生が僕を追いかけてきて、僕に言った。

「シンくんはお母さんのこと好きなんだね。大好きなお母さんと一緒にい

たかったね。お母さんもシンくん大好きだよ。お母さんもシンくんと離れてとっても寂しいと思ってるよ。お母さんもお仕事がんばってるんだって。シンくんも今日はブロック遊んで○○作ろうか。お母さんに見せたら、「すごいね～」って言ってくれるよ。先生も一緒に作るよ」と。

ここで、「それで僕はホッとした。」という言葉をそれに繋げておかしくないか自分に問い合わせる。上記の例では、これに「それで僕はホッとした。」と繋げると「うそだー！」と言いたくなるほど、文章が合わない。書いた本人は「お母さんがいい、と思って部屋を出て行っているのに、また部屋に戻ってブロック遊びをしようと言われてもする気にならない。楽しそうじゃないと思っているのに、安心はできない。」と反省し、斜体部分を下記のように書き直した。

「・・・先生もね、シンくんのこと大好き。一緒にいたいな~。今日はシンくんと一緒にいて、たくさん遊びたいけど、シンくん、先生と遊んでくれるかな？」

これなら、「それで僕はホッとした。」と繋がるかもしれない。これが正解というわけではない。正解はどこかにあるものでも、教えるものでもない。この応えた受講生本人は、「自分がシンくんなら、これで少しホッとする」と感じた、そのことがこれから彼女の成長の力になる。

「シンくん菩薩というお姿で働きかけて下さっているのですね」と言ってくれた住職を兼ねる園長がおられる。この問題場面から、シンくんが導いてくれる世界を感じられる保育者が増えてほしいと思う。

#### 4. 保育現場の真宗保育

「真宗保育」は何をもって真宗保育というのか？その保育という具体的営みを照らすものは何だろう？真宗の教えを子どもに説くことが「実践」ではないし、真宗保育を実践するために分厚い本を勉強しなければならぬ

いとしたら、それは小乗佛教の学びであって真宗とは違和感がある。

だとしたら、真宗の何をもって保育を照らし出すのだろう？真宗保育を実践する園では、それぞれに考え、取り組み、深めてきておられることう。御内佛があるかどうか、花祭りをするかどうか、報恩講をするかどうか・・という形で判断するものではないとも聞く。保育の内容が真宗保育の理念「本願に生き、共に育ち合う保育」を具体化するものであることも言われ、保育者は保育において真宗を実践するものであるとも言われるが、一つ一つの保育の具体化がどうであると、真宗保育と言えるのだろうか…いつとはなく、私は考え続けてきた。

もっと簡単に、「南無阿弥陀仏と唱えれば、誰もが浄土に往生できる」というようなものが、保育にはないものだろうか？方法論としては簡単であり、誰もができる事でなければならない一方で、そこから導かれる世界は深く、真実に近づいていかなければならない・・・。

真宗保育は方法論ではないから、各園で実施されている保育方法は様々でもある。モンテッソーリ教育、さくらさくらんぼ保育、コーナー保育、創造保育、育児担当制保育・・など、真宗保育実践園を訪問すると、多くの保育実践に出会う。しかし、真宗保育はそのどれにも通底しているものであるに違いない。それを求めて、私は2011年にアンケート調査を実施した。

詳細は、拙書「保育と心理の架け橋」（エイデル研究所刊）の「保育心理士と真宗保育」の章に述べさせていただいたが、九州連区の大谷保育協会加盟園をはじめとする155園に対して、真宗保育に関するアンケート調査を実施させていただいた。具体的な保育場面を例にあげて、保育者としての対応を真宗保育に適うものであると思うがどうかを問うアンケートであった。

第1問、はどうしても自分の気持ちを言葉にできず、手が出てしまう子どもがいる。その子に「人を叩くことはいけない」と言って聞かせるこ

とは真宗保育に適うことであるかどうか…である。①とても適っている～⑤まったく適っていない、の5段階で評価してもらう形とした。

その子に叩かれて泣いている子どもがいるのだから、「叩くことはいけないこと」「叩かれた子は痛いと言っているよ」「もう叩いたらダメ」と保育では言うだろう。もちろん、それが間違っているわけではない。「相手の痛みを知ることは大切なこと」も、確かにそうである。

しかし、法然上人や親鸞聖人は、「漁師に向かって魚をとるな」とは「河原の浮浪者に向かって死者の着物を剥ぐな」とは言わなかっただろうということが私の頭の中をよぎる。この子への関わりとして、「そのまで南無阿弥陀佛と唱える」とは、一体どうすることなのだろうか？親鸞聖人の時代には、その場で合掌して「南無阿弥陀佛」でよかったのだろうが、保育場面ではそうはいかない。この場において「阿弥陀佛に全てをお任せする」とは、叩かれた友だちと叩いた子どもとともに、どう生きることなのか？

大変興味深いことに、この問題場面に対する現場の保育者の回答は、①（とても適っている）から⑤（まったく適っていない）までのすべてに平均的に分散していた。それだけ対応が難しいとも、それだけ現場の対応は多様であるとも言えるだろう。そして、それぞれに必ず丁寧に理由が示されており、それは理にかなったものであった。

真宗は形ではない…。一言で何が分かるものか…とおっしゃる人もおられるだろう。しかし、子どもはそのことばを聞き、その態度を受け取るのである。保育という日常の生活場面では、一つ一つの言葉やささいな態度のすべてにも真宗が現れてくるとも言えるのではなかろうか。

「叩くことはいけないことくらい、子どもはわかっている」「何がどうしてそうなったかを知らずに何をやってもダメ」などの記述もあった一方、

「共にいることに支障がある叩くという行為はとめるべき」「相手の痛みを知ることが大悲につながる」という意見もあった。

いずれにしても、「これが正しい」「これでいい」という答がどこかにあるわけではないよう思う。自らの中で考え続ける問い合わせ子どもたちからいただき続けることが、真宗の保育者の姿勢であるようにも思えた。

しかし、「そのまで南無阿弥陀佛と唱える」とは、一体どうすることなのだろうか？保育場面において「阿弥陀佛に全てをお任せする」とは、保育者のどのような営みを言うのだろうか？という問い合わせは、私の中に残されたままであった。

## 5. 保育における南無阿弥陀佛

「真宗保育とは何か」「具体的に何をすることなのか」を考え続ける中で、私の中で「保育における南無阿弥陀佛って何だろう？」という問い合わせは、徐々に拡がっていった。

「南無阿弥陀佛」は、民衆においてはそれさえ唱えれば極楽浄土に行けるという、簡単にできることであり、救いである。一方、僧侶においては「自分は阿弥陀佛に全てをお任せできているか？」を問い合わせられる問い合わせもあったのではなかろうか。

真宗保育における保育者にとって、それは何なのだろう？真宗における南無阿弥陀佛は、時代や身分、状況を超えて真実を指示するものである。保育においてそれは何だろう？…と考えてみると。どこかに行かなければ学べない、師がいなければ得られないというようなものではなく、気づきさえすればどこでもできるような保育者を導くキーワードはないものか…。

「音楽劇・愚禿釈親鸞」の中の親鸞のセリフに「往生とは死ぬことではない。生きながらにして御佛に抱かれていることに気づくこと」とある。「御佛に見守られた自分であることに気づくこと」は、その光があたることで物事の真実が見え出てくるものであるということだろう。保育におい

てそのようなものがあれば、保育者は随分助かるのではないかだろうか。そして、「阿弥陀如来に見守られた自分に気づくことで、今生きている自分の拠り所がみつかる」のであるから、保育における南無阿弥陀佛とは、それが見えることで保育者が自らの拠り所が得られるものとなるだろう。

そんな風に考えつつ、保育者に正解を押しつけるのではなく、自分の矛盾に気づき、自らの拠り所となり、子どもと自らの真実に気づく手助けができないものが私の課題であった。

私は、3で述べた一人称ワークにおいて、一人称で状況を語ったあとに「それで、ボクは安心した。私はホッとした」ということばを繋げるよう指示しながら、受講生に「それでボクは安心した、と繋がる？」と繰り返していた。「それに繋がればいいのよ」というと「本当にそれだけでいいのですか？」「子どもが安心すればいいの」「でも、この子は友だちを叩いたんです」「でも、その子は安心できていなかったよね」「はい」「それで、どう言ったらその子は安心できたの？」「本当にそれだけで・・・？」まさに、民衆が「本当に南無阿弥陀佛と唱えるだけで浄土にいけるのかね？」と尋ねた姿が重なってくる。

その保育者はこのことばによって導かれ、子どもの姿を借りた御佛がその保育者を導いているかのように思える。その時にまさに、「子どもが安心し、安心していられる子どもと共にいることで保育者が自らの矛盾に気づく・」嘗みがそこに生まれていることを感じたのである。この「それで、ボク（私）は安心した」こそが「保育における南無阿弥陀佛」ではなかろうか。

「子どもに寄り添ったつもり」でも、そうはないことが多い。先のシンくんの事例でも、「シンくんの好きなものあるかなあ・・と部屋

を指さす」という回答があった。シンくんが帰りたいということは分かっていて、本人は「子どもの好きなものを聞くことで、子どもの気持ちに寄り添う」つもりであった。それが「つもりにすぎないこと」に気づく方策がなければ、学びは進まない。

そこで、シンくんの一人称で書き直して、「それでボクは安心した」を繋げてみると、この回答では「それでボクは安心した」に繋がらないことが分かる。

そこで、シンくんの一人称の立場のままで「自分ならどう言ってほしいか」を考える。すると、「シンくんである私はどう言ってもらったら安心する？」と自らに問いかけることになるのである。すると、自分の中から強引でない近づき方やことばの選び方、シンくんが話したいと思う話題や対応が見えてくる。保育者としてどうすればいいか、どうしなければならないかではなく、子どもはどうしてほしいのか、どうすれば安心するのかが見えてくるのである。

何がしてやれるか、何をするか・・自力の保育を考えていた保育者が、相手は何をしてほしいのかという発想と出会う。そこでは、（佛の）子どもが見守られていると感じた時の子どもの力を信頼してかかわる保育者として生まれかわるのである。

そのことばが自らの保育実践を照らすことで、自分の保育を（佛の子どもとしての）子どもたちの視点で見直すことができ、子どもに寄り添ったものであるかどうかを見いだすことができる。このプロセス 자체は決して難しいものではない。易行と言っていいだろう。

しかし実際にやってみると分かるが、「それでボクは安心した」が心に収まるまでは、多くの悩みや葛藤を経験する。たどり着いたつもりでも、いつの間にか再び迷いの中に落ち込んでゆく。そして、そのことばに合うための働きかけを模索する原動力となるものである。・・・そんなところも「ただ南無阿弥陀佛」と似ているのかもしれないと思った。

## 6. おわりに

「子どもが安心して、それで？」という思いも浮かんでくるだろう。子どもが安心できれば、その子どもと保育者は、阿弥陀如来の手の上にいるのである。安心した子どもとその側にいる保育者。その姿こそが南無阿弥陀佛、保育者が何とかしようとする計らいを超えて、「救わないではいな」いと誓われた阿弥陀如来の前にいる姿に思えないだろうか？

寺族であり保育心理士でも臨床心理士でもある、あるぶろほの受講生は、この「一人称ワーク」の体験を次のようにレポートしてくれた。

「このワークの肝は、最後に『それで、ぼくはホッとした』とつなげるところで、自分の考えが、自分の体験に変化するところだと思います。単に『子どもが言ってほしい言葉』を頭で考えようとして、気づかないうちに自分をごまかして、間違った方向に行ってしまいがちです。

そこで、『それで、ぼくはホッとした』とつなげることで、自分の考えを、一旦自分の身体の中に通し、身体感覚に問いかけ、体験するのです。体験は、自分でごまかしようのない『確かなもの』です。

そこにお問い合わせするという過程と、僧侶が自らの信心を問い合わせる過程との共通点には、はっとすると同時に、自分の中でぴったりくる感覚がありました。

阿弥陀如来の救い、南無阿弥陀佛・・・。頭で考えようとすればするほど分からなくなってしまうけれど、一度体験すれば、自分にとっての『確かな』拠り所となる。分からなくなったら、その感覚に繰り返し立ち戻ればいい。このワークと通じるところがあるように思いました。」

また別の受講生も、

「一人称にすることで、今までよりも深く子どものことを知ることができただけでなく、今まで「困った」「仕方ない」とマイナスのイメージで捉えていたことが「なるほど、そういうことか」と納得でき、肯定的に関わるよう感じられました。」

「自分は保育や子どもたちを自分の思っている方向へ持って行こうとしてしまいます。一人称ワークでは、その状況で自分はこんな関わりをするだろうなど書いて、それを子どもの立場で書き直してみると、実に保育者主体の考え方、関わりだったこと、子どもの心に寄り添えていなかったことに気づかされました。このワークブックは自分の宝物です。」と書いてくれている。

また、真宗保育の先達には、

「子どもの声を、菩薩さまの『声』として、保育者が聞いていくところに『一人称ワーク』の学びがあり、『保育者が虚心に菩薩さまの声を聞いていくことの大しさと必要性』と『それにワークを通して出会うことができるありがたさ』を受けとめました」と言って頂き、ありがたいことだった。

事例として提出される現場の子どもたちの状況は、さらに様々である。私はその度に「それで、その子は安心する？」「その子はそうしてほしいと思っていると思う？」と問い合わせる。その子が安心し、その子自身が側にいてほしいと思う保育者が側にいてこそ、その子はここにいる自分を受け入れることができ、自分を表現することができる。必要な関わりが見えてくるのは、ここからである。

ここから先は、子どもの状況に対する理解やその理解に基づく対応の幅も必要であり、時には発達障害や虐待などへの知識も、あるいはベビーマッサージなどの身体へのアプローチや表現療法などの芸術的アプローチ、さらに言語治療などの技法も必要になる。子どもの心理や子どもの背景への理解、子どもの状態を軽減するための提案や関わりが分かっていかなければ、「それで、ボク(私)はホッとした」の先に進むことはできないのである。

それらは保育者養成校の段階ではほとんど不可能であることは明らかであった。それに気づいた筆者は、子どもと保育研究所ぶろほを設立し、それらを丁寧に紡いで構成された科目を実施して1年が経つ。今ますますそ

の必要性を感じている一方、どの養成校でも使える普遍的なものとして提示できるよう工夫を重ねてゆきたいと思っている。一人称ワークブック「あなたの一言」と拙論がその一助となれば幸甚である。

最後に、私に真宗への道を開いてくださり法名を賜った故宮城顕先生、執筆に際してご助言を頂いた大谷保育協会理事長脇淵徹映先生、大谷大学佐賀枝夏文先生、あかつき幼稚園村上順滋先生に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 「保育と心理の架け橋」 山田眞理子先生を囲む会編 エイデル研究所  
「あなたの一言 ワークブック」 山田眞理子著 ぶろほテキスト